

## 「JENESYS2018」第二十三回中国教育関係者代表団 参加者の感想（抜粋）

○短くとも収穫の多かった今回の日本訪問では、新宿区立落合第一小学校見学、文部科学省による講義、大阪府教育庁との懇談、大阪府立北野高等学校訪問を行った。これらのプログラムを通じ、日本の現行の教育施策や未来を見据えたこれからの学習指導要領について、おおよそ理解することができた。私としては、日本の教育が小学生の道德教育に力を入れている状況を見たり、児童生徒の授業の様子を実際に目にして、大変感銘を受けた。未来を生きる子どもたちに質の高い道德教育を施すことは、彼らの一生にわたる大切な土台を築くことにもなる。中国でもこれと似たカリキュラムが組まれてはいるものの、具体的な実践において日本に見習うべき点があると感じた。他にも、弱者への配慮が行き届いていたり、バランスのとれた教育の進展が重視されていることも、日本の教育が成果を挙げている大きな理由の一つだろう。弱い境遇にある人々をきちんと育て上げられる民族こそが、これからもしっかりと発展していくことができる。中国でもそうした仕組みや制度が整えられており、日本と同じ目標を目指している。今回見学した北野高校でも、取り組みの多くに中国と共通する部分が見られた。互いに参考にし合える点もあるのではないだろうか。

○自分の学校の児童生徒や同僚らと日本の教育の状況、とりわけ家庭や地域社会による教育への参与やサポートについて見聞きしたことを共有する。生徒に向けては、日本の生徒たちの安全意識や環境意識について、また熱心なスポーツ活動のことをたくさん紹介しようと思う。そして学級担任や理科教員らと共に、ゴミ分別など環境保護の啓発活動を繰り返し広げていきたい。これからの自分自身の仕事や生活においては、日本の文化・経済・芸術などに関する本を多く読み、日本への理解を深めていきたい。

○今回私にとっては初めての日本だったので、着いてまず、その整然とした街並みや清潔さに目を奪われた。新宿区立落合第一小学校訪問では、校内に設けられた特別支援学級が最も印象に残っている。ここは、発達障害児たちがより適切な指導を受け、教員のサポートで次第に自分に自信を持つようになり、他の仲間たちと同様、今をより良く暮らしていくこと、将来をより良く生きていくための学びを深める場であった。私たちが教育活動の中で同じく発達障害児たちに出会う。日本での特別支援方式は私に多くの気づきを与えてくれた。彼らを指導するだけでなく、もっと大切なのは「照準の合ったきめ細やかな支援」なのだと意識させられた。

私たちは他にも大阪府教育庁との懇談会に参加したが、ここでの教育目標もまた、「違いを認め合う」というものだった。地域が違っていても教育の力点は変わらない。つまり、どの子にも最良の教育を受ける権利があり、子ども一人ひとりが自己を認識し、自分を発見し、肯定すると同時に、人のことをきちんと認め、他人を思いやれるよう学校は全力で支える、全ての子がこうした好ましい雰囲気の中で心身共に健やかに成長していかなければならない、というものだ。

○帰国後は、日本の小中高校における身体能力向上への強い関心、例えば、授業間の休み時間での活動や午後のクラブ活動について同僚教師らと共有したい。健やかな体があつてこそ、児童生徒は厳しい勉強にも挑戦できるし、強い意志を育ていけるのだ。

また、国民一人ひとりの正しい行いや自覚を養う教育などは、私たちが道徳教育を進める中で注力し見習わなければならない目標であろう。学校が人を育てることの究極の目的は、世の中の役に立つ市民を育成することであり、市民の民度はその国の未来の成長の行く末を決定付けるものだからだ。

○文部科学省での講義で、現在の日本の科学技術や経済の高度な発達は、一つ目には一貫した教育重視の歩みと無縁ではないこと、二つ目には科学的先見性のあるカリキュラム設計の賜物であること、三つ目には効果的な実践の徹底にある、ということを知った。例えば、初冬の寒さの中、子どもたちが半袖短パンで体育の授業を受けている姿は、私たちに「剛毅」を感じさせたし、子どもたちが班を作り、自分たちだけで登校する様子には「自立」を、一生懸命教室や校内を掃除する姿には「勤労」を、授業に生活科や家庭科が組み込まれている点には、学校が単に知識を教えるだけではなく、それ以上に子どもに如何に命への「責任」を担っていくかを教える場であることを、剣道や相撲、柔道を学ぶ武道場は、何より「日本文化と礼節」を継承する場だということを私たちに思い知らせてくれた。

○豊島区立西池袋中学校を訪問した際、学校に足を踏み入れてまず、その清潔さと整理整頓、落ち着きと静けさに心を打たれた。校内の清掃全てが生徒たちの手によるものだと聞き、日本の生徒の労をいとわない勤勉さと真面目さを見たような気がした。ここは中規模校ではあったが、教育関連施設や設備が完備され、しかも合理的で人に優しいデザインだった。この生徒に対する一番の印象は「本分」の二文字である。わざとらしさや不自然さなど感じさせず、中学生らしい伸び伸びとした様子、懸命に取り組んでいる姿勢が見て取れた。先生方の職員室は決して広くはなかったが、きちんと整理整頓され、熱心で誠実な指導振りが窺えた。とりわけ、生徒それぞれの状況に応じた数学の習熟度別授業は、参考価値の大変高い、中国でも広めていくべき指導方法だと感じた。また、生徒の心身の健やかな成長のため学校が行っている部活動の数々は、生徒の実践能力を鍛え、たくましく生き抜く力を培い、読書する力をつけさせるもので、日本の教育が単に教科書の知識を積み上げるだけでなく、それ以上に生徒の心身の健康と人格形成、未来への適応能力の育成を重んじていることの表れだと思った。中でも体育の授業での半袖短パンによる「耐寒」指導などは、生徒の我慢と頑張りとう上心を培うものであろう。半日の見学と交流で感じた全体的な印象は、これからの教育のあり方に対する国と社会の関心の高さであり、学校、教師に対する確たる尊敬であった。また、日本人の時間厳守へのこだわりと規範意識、仕事に対する姿勢というものも窺い知ることができた。私自身、我が身を振り返ると同時に、そうしたことをこれからの自分の仕事や生活の中で貫いていきたい。